茶仙の詩

春日茶山 病 不飲酒 因呈賓客
杜牧

笙歌 登 畫船 十日清明前
山秀白雲膩 溪光紅粉鮮
欲開未開花 半陰半晴天
誰知 病太守 猶得作茶仙

【現代語訳】

春日の茶山行事に、大切な客人を連れて湖洲に船で遊覧したが、
病気で私は酒が飲めないので、座興にこの詩を差し上げることにした。

杜牧（唐代の詩人）

笙と歌い手を遊覧の船に乗せて賑やかなのだが、あと十日で晴明節だ。
山は美しく、白雲は肌の様に滑らかで、渓は歌姫の唇のような花が咲く。
咲こうとしても未だ開かぬ花々よ、半ば陰り、半ば晴天というところか。
誰が知るものか、病気の郡長官など。ま、酒仙はダメでも茶仙には成れる。

令和六年一月二十日

大中臣正比呂　拙訳